

救急集中治療医学

(旧・救急医学講座)

織田 成人

医学部附属病院においては1979年に救急部が，また1982年に集中治療部が設置され，お互いに協力しつつそれぞれ臨床活動を行ってきた。また医学部学生に対する授業も救急部・集中治療部の教員が行ってきていたし，卒後研修に関しても救急部・集中治療部に直接入局してくる研修医，さらには各科からのローテーターに対して，これらの病院籍の教員が臨床研修を指導してきた。一方救急医学を医学部で教えることへの強いニーズ，さらには救急医療への国民の大きな期待を受けて，本学医学部においても従来から救急医学講座開講を文部省に概算要求してきていた。そして長年の念願がかない，1994年度に救急医学講座の開講が認められ，予算措置された。これは大阪大学，東京大学，東北大学に次ぐ，全国国立大学で4番目のものであった。

早速教授選考委員会が発足し，教授選考が行われ，附属病院救急部ならびに集中治療部の部長で助教授職にあった平澤博之（1966年本学医学部卒業）が教授に選考され，1995年1月1日付けで発令となり，ここに救急医学講座が医学部第31番目の講座として開講した。

開講当時の教員の定員は，前述の教授のほか，附属病院救急部から振り替えた助教授，医学部第二内科から振り替えた助手の3名であった。しかし実際には助手は配置されず，平澤博之教授のほかに，講師として菅井桂雄（1976年本学医学部卒業）が就任し，教員2名で開講した。救急医学講座に対応する附属病院の臨床部門は救急部・集中治療部であった。救急部には正式な教員の籍はなく，集中治療部の講師1，助手2が実質的には救急医学講座の授業，とくにベッドサイド学習などを担当し，実質5名の教員で医学部学生に対する授業を担当してきており，このままの体制が今日まで続いている。講座発足と同時に，医学部本館の2階に教授室，医局兼図書室，研究室4部屋などを確保し，他の講座と同様に，基礎的，臨床的研究を施行する体制が整った。また1996年1月菅井講師が助教授に昇任した。講座としての研究体制を整備すべく大学院学生を募集し，1997年度より救急医学専攻の大学院生が入学してきた。またその間海外への留学も行い，2名が米国ジョンズホプキンス大学医学部，ルイヴィル大

学医学部へ留学した。その後も米国を中心に教室員の海外留学は継続している。

2000年4月に，織田成人（1978年本学医学部卒業）が菅井桂雄の後任として助教授に昇任した。2001年4月の組織改変（大学院化）に伴い，講座名が救急集中治療医学に変更された。この間，平澤博之教授は数多くの学会を主宰したが，特に1999年3月には第26回日本集中治療医学会総会・学術集会を，また2004年10月には第32回日本救急医学会総会・学術集会を，いずれも千葉市幕張メッセ日本コンベンションセンター国際会議場で開催した。

2006年3月に，平澤博之教授が定年退職となり，2006年8月，織田成人が二代目教授に選考され就任した。現在まで，18名が本講座の博士課程を修了し，学位を取得している。

臨床的活動は附属病院の救急外来，および集中治療室（ICU）をその舞台として活発に行われ，多くの救急患者や院内で発生した最重症患者を引き受け治療した。教室としての研究の主たるテーマは「多臓器不全の病態と治療に関する研究」であり，細胞レベルからみた多臓器不全の病態や，それを踏まえた上での血液浄化法を駆使した治療法により，優れた治療成績をあげ，その成果を国内外の各種の学会で発表して注目を集めている。特に持続的血液濾過透析（CHDF）は，当講座がわが国で最も早く臨床応用し，その普及・発展に貢献してきた。さらにCHDFを用いた重症病態，特に重症敗血症や重症急性性肺炎，劇症肝不全等の治療に関しては，わが国をリードする研究成果と臨床成績を誇っている。また最近の研究テーマとして，重症敗血症における好中球mRNA発現と免疫麻痺の研究，免疫－炎症反応関連分子の遺伝子多型解析，プロテオミクスを用いた重症病態の網羅的タンパク解析，外傷性脳損傷における神経再生に関する研究，心肺停止蘇生後の予後予測に関連する新しいタンパク測定の意味等，多くの研究成果をあげている。当教室には現在2－4名の大学院生が在籍し，臨床に研究に日夜研鑽を続けている。今後も，様々な研究が行われ，さらに発展することが期待される。

（おだ しげと）